

<書評>

竹村和子著

『フェミニズム』(シリーズ 思考のフロンティア)

(岩波書店 2000年 xii+129頁 ISBN4-00-026432-X 1,200円)



館 かおる

『フェミニズム』というタイトルの本を書くのは様々な意味において難しいことである。2000年夏、著者竹村和子は、その行為に挑み、「思考のフロンティア」の名に相応しい仕事を行った。認識の根本に切り込む綿密な批評理論研究として「フェミニズム」を提示したのである。

著者はこれまでのフェミニズムが依拠してきた「女というカテゴリー」の自明性を問題化し、その根拠がもはや有効ではないことを本書で論証していく。このような論証を可能にしたのは、著者が欧米の最新のジェンダーとセクシュアリティ理論研究を翻訳・解説する行為の中で、それらを著者自身の思考として培い、自らの論考を創出してきたからである。

「女というカテゴリー」への問題化は、まず「身体」に向けられる。なぜならば、「『女』というものはたやすく身体的な次元に回収され、身体は還元不可能な与件であると理解されている」からである。現在のわたしたちの「身体」は、まず外性器の形状が特権化され、それを中心に意味づけられ、人を「二種類の身体」のどちらかに振り分けることで認識させられている。だが、著者は、「わたしたちは自己の身体を、自己が参入する社会の<言語>にしたがって解釈する」と言う。著者はフロイトの「身体自我」と「身体表面」の概念に注目し、フロイトの洞察は、「身体」の概念を生物学的決定から引き離す契機を逆接的に提供したと評価する。また、ラカンの「身体が実体的な物質としてではなく、鏡に映った形象として想像的に獲得される」という分析、イリガライの「女の言語/身体は『模倣』であり『形態』である」という把握、バトラーの「ファルスという身体自我/身体表面のパフォーマティブな置換」という理論から、「身体の形態」の増殖が二極化された性的差異を空洞化していき、身体形態の模倣の失敗や錯綜した動的軌跡が、新しい身体を開いていくものになると結論づける。このようにセックスの虚構が明らかになると、セクシュアリティの把握も変わらざるをえない。「男」の性欲望も「女」の性欲望も、異性愛の性実践も社会的な構築物であり、唯一所与の真実ではないと認識することになるのだ。

次に「女というカテゴリー」への問題化は、「慣習」へと向けられる。その論述は、ブルデューのハビトゥス(規範システム)の概念を用いて進められ、女が有償労働や公的領域に参入する時、それを阻む「ジェンダー化されジェンダー化するハビトゥスが女に与える象徴的暴力」を、「ホモソーシャル」の概念から照射して展開する。フェミニズムは、「女」というカテゴリーに属するものへの差別や抑圧、そこからの解放という図式で思考されてきたが、その思考は、「男」というもうひとつのカテゴリーとの関係性によって差別構造も解放の方向も規定されるのである。セジウィックにより提唱された「ホモソーシャル」という概念は、異性愛の男社会、男同士の絆が、「女性蔑視」と「同性愛嫌悪」を内実とすることにより、「ホモソーシャル」な社会に参入する女の身体認識を分裂させることを指摘する。

著者は、このように慣習行動の規定性を説明してきたあと、慣習行動が内包する否定された愛や挫折した欲望は、慣習行動の単純な反復生産を阻み、それを構造化しているハビトゥスを変形し、新しいハビトゥスを出現させる可能性があることを指摘し、それを「逆構築」という表現で示すのである。

「女というカテゴリー」への問題化は、次に「グローバル化」に向けられる。主題は、植民地主義による性搾取であるが、「ポストコロニアル批評」による分析はけっして単純ではない。近代国家は自国の規律的な性体制を維持するために、その外部に自国では容認されないおぞましく魅惑的なセクシュアリティを有する性的な他者を生産した。また、国境の内側の男と外側の男、内側の男と外側の女、内側の女と外側の女の関係は、主体－他者の問題を錯綜した形であらわす。さらに帝国主体は、近代美術におけるアフリカニズムのように、置換された他者性を再占有することにより、(ネオ)コロニアルな権力の拡大にむかう。このような分析に続けて著者は、帝国主体が再占有を願望する他者から最も遠い存在は「植民地の女」であると捉え、戯曲『Mバタフライ』を事例に、異性愛の欲望の幻想が粉碎され、定式を失った欲望が「帝国主体」を混乱させていく姿を描写する。ここから著者は、帝国主体の解体が可能になるのは、異性愛にまで遡った主体－他者の〈欲望の定式〉の解体においてであること、他者性が模倣的な仮想であるならば、他者性の攪乱は、表象において行われることを主張する。

最後に著者は、近年のグローバル化とフェミニズムの関係について次のように語る。グローバル化は、語る言葉を奪われていたサバルタンの女（植民地の女、根源的他者）が、移動により表象可能領域に参入する機会を得ることをもたらしたが、同時に、サバルタンは困り込まれ、帝国主体の異性愛の男の位置を脅かさな女（妻や娼婦）となって資本主義的家父長制に取り込まれていく事態も生じさせている。現実のグローバル化は、世界女性会議の役割の有効性と問題性、サイバーポルノや女性の貧困化などの多層的な状況を呈している。このような状況の中で、フェミニズムは、新帝国主義のグローバルな投網のなかで窒息していくのか、それとも批判的に介入していくことができるのかと、著者は自らに、読者に、問いかける。そして、フェミニズムが挑戦していく道があるとすれば、「抵抗の現在性<sup>アクチュアリティ</sup>と自己参照性」ではないかと述べ、著者のフェミニズムの思考の旅をひとまず休止する。

フェミニズムの多様性を損なわずに、できるだけ筋道をつける努力をしたと言う著者の意図に添い、本書の要約を試みたが、最後に評者が捉えた、著者のフェミニズム理論の特色を述べたい。著者は、本書にてしばしば「性の制度」の再生産という表現を用いる。この「性の制度」の再生産を、日本のフェミニズム理論ではあまり展開されていない「精神分析理論」を駆使して論じた著者の功績は、実に大きい。著者は、「自己形成」と「身体性を含む性自認」と「言語獲得」が相互不可分の動的関係にある「性の制度」の再生産の理論化を試みる。著者のアクチュアルな問題意識は、現在のグローバル化の局面において、さらに錯綜した状況で「性の制度」の再生産が行われていることを見逃さない。それ故に、「ポストコロニアル批評」理論を拡張しながら、「性の制度」の再生産の脱構築に挑み続けるのである。

本書の問題点として、アメリカ合衆国のフェミニズム理論・運動が中心ということ、人間の認識の経済的・法的規定要因についての留意が弱いということなどがあげられるが、しかしながらそれは原著の価値を損なうものではない。単純化や領域化に陥ることなく、「創造的で批判的な分裂と個別化のあいだの、可能性に満ちた、危うい隘路」を、自己参照性という倫理的なポジションを自恃しながら進むという批評理論の緊張感を、どれほどの人々が共有できるのかという思いをめぐらせると同時に、読者は、その希少性の価値を、改めて、確実に、知るであろう。

(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授)